

女性研究者技術者委員会ニュース

No. 25 2012年12月25日

連絡先：日本科学者会議全国事務局 Tel：03-3812-1472、Fax：03-3813-2363
e-mail：zenkoku@jsa.gr.jp ホームページ <http://www.geocities.jp/jsajosei/>

目次

1. 特集 第19回総合学術研究集会分科会 報告
「女性研究者・技術者のこれまでと今、そしてこれから」
1-1 プログラム 1-2 分科会趣旨 1-3 まとめ 1-4 報告者からのひとこと
1-5 交流会報告 1-6 参加者感想
2. 日本科学者会議学術体制部主催のシンポジウム報告
3. 各地の話題
4. 2012年女性研究者技術者委員会活動報告

1. 特集 第19回総合学術研究集会分科会及び交流会

1-1 分科会及び交流会プログラム

①分科会

*日時 9月15日(土) 10:00~13:00

*テーマ 「女性研究者・技術者のこれまでと今、そしてこれから」

*スタッフ(敬称略) 分科会趣旨説明：石渡、司会：金子、まとめ：沢山

*基調報告 「労働時間の性別2重構造と助成研究者」 関西大学 森岡孝二氏

*各分野報告

「大学でのジェンダー教育から見えてくる傾向と課題」 岡山大学 松本直子氏

「若手研究者の研究環境」 岡山大学 宮崎祐子氏

「女性研究者のキャリア形成」 神戸大学 朴木佳緒留氏

②女性研究者・技術者交流会

*日時 9月14日(金) 18:00~19:30

*企画・準備(敬称略)：沢山(委員)、笹倉(岡山支部)

1-2 分科会趣旨

「女性研究者・技術者のこれまでと今、そしてこれから」は、昨年開かれた「女性研究者・技術者の明日を考える」シンポジウムでの議論を引き継ぐ形で開かれました。女性シンポジウムの目的は、「女性が科学技術に参画することで、『競争』から協調へ、『序列』から『ネットワーク』へ、利潤追求型から共通目標へ向かって努力できる仕組みを作っていけないか」を探ることを目的としたものでしたが、分科会では、シンポジウムでの議論を引き継ぎつつ、さらに多様な角度から女性研究者・技術者の現状を明らかにし、これからの女性研究者・技術者の課題を明らかにすることを目的としました。そのために、女性研究者のライフコースを意識しつつ、①大学でのジェンダー教育の意義、②若手研究者のキャリアデザインや研究環境、③女性研究者が

大学での意思決定過程に影響を及ぼすポジションにつく意味や実情を問う三本の報告を用意しました。また、女性研究者問題をより広く日本の労働環境のなかに位置づけるために、日本特有の、労働時間の性別二重構造の問題を考える基調報告をもうけました。

(女性研究者・技術者委員会 委員長 沢山美果子)

1-3 分科会まとめ

15日午前中に開かれたこの分科会は、参加人数16名、内、男性会員の参加は2名、非会員は3名と少人数ながら、熱心な討論が繰り広げられ、実り多い分科会となりました。

コーディネータは女性研究者・技術者委員会委員長、沢山美果子さんです。最初に副委員長の石渡真理子さんからご挨拶いただき、続いて、金子幸代さんの司会で開始しました。

まず基調報告として、関西大学の森岡孝二氏の「労働時間の性別二重構造と女性研究者」についてのお話しです。平均労働時間はグラフ上では一見、年々減ってきているように見えるが、女性のパート労働が増えているためである、というカラクリ。フルタイムの男性労働時間は延びる一方で、しかもほとんどサービス残業という実態。睡眠時間はここ約20年ごとに1時間ずつ減り、男性の家事労働は、実質ゼロに近いなど、非正規化が進む現代の労働形態における問題点を分かり易くご説明いただきました。

2番目は岡山大学で考古学がご専門の松本直子さん。「大学でのジェンダー教育から見えてくる傾向と課題」と題し、ご自身の専門から、教科書に現れる縄文人の家族イメージが、いかに現代の作られた男女役割分担に合わせて描かれているか、をまず示されました。また、脳の男女タイプ分け(システム化タイプ、共感タイプ)テストを学生にやらせると、平均値では確かに男女差は出るのですが、分布がきれいに分かれるわけでないことを実感してもらえます。

次の岡山大学若手研究者、宮崎祐子さんの「若手研究者の研究環境」は、パワーポイントを駆使して、若手研究者の辿って行く道筋、現在のシステムの中での選択肢(大学院(学振D1、D2)、ポスドク、学振PD、海外特別研究員、テニュアトラック等々)を分かり易く示していただきました。昔の単純な道筋しか知らなかった者にとっては、システムばかり次々いじり回されて、本当に研究にプラスになっているの?との疑問とともに、とても参考になりました。

最後に神戸大学の朴木佳緒留さんは「女性研究者のキャリア形成」。神戸大では「女性研究者養成システム改革加速事業」により計21名の女性が採用されるとのことで、「意思決定機関」に女性が入ることが重要との指摘がありました。しかし現実社会はまだまだ、幼、小、中、高と行くにしたいが、教員の男性比率があがり、特にトップは常に男性、子ども時代からそれが当たり前の「風景」として刷り込まれてしまう社会です。女性が管理的な職に就くことを止めるような「善意のジェンダー」、「成功恐怖」が暗黙の内に働いていると指摘されました。

全体に大変充実した内容で、これをさらに次に繋げて「これから」を考えて行けたらと思います。

(常任幹事 河野貴美子)

1-4 報告者からのひとこと

①19総学の「女性研究者・技術者のこれまでと今、そしてこれから」という分科会で報告する機会をいただき、とても楽しく、刺激的な経験を得ることができた。4本の報告はどれも異なる視点のものであったが、相互に関連し合い、女性研究者をめぐる諸問題を改めてはっきりと認

識することができた。中でも、宮崎さんの「若手研究者の研究環境」についての報告は、男女を問わず、いまの若手研究者が直面している厳しい状況を鮮明に伝えてくれ、私も厳しい就職活動をしていた時のしんどさ、苦しさをまざまざと思い出した。研究職に限らず、職を得ることや働くことの苦しさ、厳しさが、本来可能なはずの女性と男性の協力関係を難しくしているのではないか、ということは、授業を通して感じている。ロールモデルとしての女性研究者や女性リーダーが増えることが効果的な手段であることは間違いないが、それを成し遂げるためにはよりよい社会像をより具体的に示していく必要もあることを感じた。

(「大学でのジェンダー教育から見えてくる傾向と課題」報告 岡山大学 松本直子)

②女性研究者のキャリア形成について報告した。報告者としては、女性研究者がポストを得るだけでなく、組織の意思決定に影響力を与える大切さを述べたつもりである。現実には安定的なポストを得ること自体が至難の技と言ってよい状況があるため、意思決定過程への参加については何らかの疑問等が出され、話が展開すると期待していたが、そうではなかった。期待とは違う状況になった理由はおそらく、分科会参加者の多くが一昨年、昨年と同じメンバーであったためと思われる。分科会全体としては、女性研究者のライフサイクルに応じたかたちでの報告が配置されていたため、課題を整理することができた点で、大変に良かったと思う。若い人々が参加してくださればより良かった、という思いは残ってしまったが、同時に、その解決策は容易には見つからないだろうという「弱気」も持ち合わせてのことである。ひょっとすると、人が集まって、議論するというスタイル自体が「古い」のかとさえ思ってしまったが、いかがであろうか。

(「女性研究者のキャリア形成」報告 神戸大学 朴木佳緒留)

1-5 交流会

19 総学初日の 18 時より恒例の女性研究者交流会を行いました。なかなか事前申込者が集まらず心配していましたが、結果的には 21 人の参加を得てまずまず盛会でした。参加者は大学院に入ったばかりの学生さんから、もうすでに退職されて 10 年以上経っていてもまだまだお元気な面々まで年齢的にも幅広く、男性の参加もあり、子連れ参加もあり、非常にバラエティに富んだメンバーでした。

話題としては、最近大学に広がりつつあるテニュア・トラック制度について、岡山大学のウーマン・テニュア・トラックの方の話を伺ったり、まだまだ今も男社会が残っているね、やっぱり今でもほとんどの



「長」は男だねという話や、いやいや男性の意識もかなり変わって来ているよという話、最近は何人が削減されて休みが取りにくくなって来てるねえ、という話等、あっという間の 2 時間でした。今回の話を聞いて大学院生の方が研究者になろう！と思われたかどうかは甚だ疑問ではありますが、何かの参考になったのではないかと思います。

(総学実行委員 岡山大学 笹倉万里子)

1-6 聴講者の感想

①基調報告(大変よかった:5 どちらともいえない:1 期待はずれであった:0 回答なし:2)

*労働時間の統計データのマジックがよくわかり興味深かった。

*大変良かった。

*女性・男性にかかわらず、日本人の働き方・働かされ方では、「社会は持続できない」ことを改めて感じました。バリバリ働く(働きすぎる)「男性正社員モデル」から1日も早く脱することが必要だと思います。それによって、女性も男性も数少ない正社員として課題な負担を強いられている人にとっても、仕事を得られず苦勞している人にとっても、くらしやすい、働きやすい社会になりますね。

*女性研究者の進出・活躍にとっての障害の根本は、日本の労働時間の2重構造、労働のあり方の矛盾にあることが、明確なデータとわかりやすい説明でよく理解できました。正職員の長時間労働は20年間全く改善されておらず、低賃金・不安定雇用のパートアルバイトが非常に増加していますが、研究部門にせよ、生産部門にせよ、レベル低下につながると思います。研究者・技術者の男女共同参画推進と同時に、日本の社会体制・社会通念の改革運動が重要であると感じました。

*現在の労働条件がさらに女性が働くことを困難にしているということは分かっていたが、その歴史的背景や経過をまとめて聞くことによって、問題の所在が良く分かった。

②各報告(大変よかった:6 よかった:1 期待はずれであった:0 回答なし:1)

*いずれのお話からも無意識のうちに深く根ざしたジェンダー意識がわかり面白かった。研究者を今後きちんと育てるために女性の側からの様々な提言が必要と思った。

*松本さんの報告は、私自身が学生教育・授業において痛感し悩んでいることでもあったので、大変興味深くお話を伺いましたし、参考になりました。ジェンダー教育がある程度進んできたので、さらに丁寧な議論・説明が必要になっていると実感しています。

*宮崎さんの報告は、若手研究者の状況がリアルに迫ってくるもので良かったです。ただ、育てる若手を支援だけでなく、人員(ポスト)削減の中で物理的な解決が求められると思います。

*朴木さんのお話を伺うと、いつも自分自身を反省させられます。「女性」を隠れ蓑に、大変な仕事をしないですむのはラッキーと思うことも正直にいえませんが、「ロールモデルとしての風景」の効果のことを考えると、隠れていないでがんばらなければならないかなと思わされます。

*基調報告も各報告も相互に関連した内容で、日本における女性研究者の問題点を理解し、それについての対策を考えるのに大変有意義な機会でした。

*考古学から見たジェンダーの視点は理系の私にとって目新しい視点であり、心から共感できました。自分自身、博物館の展示をみて松本さんのような疑問を持たなかったことを恥



しく思います。宮崎さんの報告は若手研究者・ポストクの現状を大変よく整理されており、広く学生・院生にレクチャーすべき内容だと思いました。女性と男性の上位職への意識のちがいやロールモデルの話を、非常に興味深く拝聴しました。保守的でジェンダー意識が強いなかで、朴木さんが責任ある立場で奮闘しておられる様子に、心から敬意を表します。

- *いずれの発表も良かった。現代の課題や状況がよく理解できたが、今後、どうすればよいのか、もう少し話されるとよかった。
- *松本さんの授業内容がとても興味深く、学部生の時にジェンダーについて一連の授業で学べることは大きいだらうと思いました。世代交代でしか世の中は変わらないと思っている人が多いのは、今の政治のあり方のせきになではないかと思います。
- *朴木さんの“ジェンダーの再生産”という定義は、無意識のうちに行っていることを意識させる概念で、重要なキーワードだと思いました。

③運営・企画

- *参加者が少ないのが問題。これについて討議する必要あり。
- *時間通りにスタートできるよう、同じ部屋を使用する直前のプログラムとの間は、ある程度時間の余裕を持たせたほうがよいかと思います。
- *個別報告の報告者・報告内容のバランスがとても良かったと思います。
- *大変充実した分科会でした。多くの女子学生に聞いてほしい内容でした。次回は、JSA 会員の教員を通じて、企画ちらしを学生に配布していただいたらどうでしょうか。
- *スタートが多少準備不足でもたついていた。アクシデントで仕方がなかったかもしれない。
- *体験談を中心としたセッションを構成されるとよいと思う。

2. 「高等教育と科学・技術の危機の打開に向けて」

—日本科学者会議学術体制部主催のシンポジウム報告

2012年4月14日、東京で「高等教育と科学・技術の危機の打開に向けて」と題して、JSA学術体制部主催のシンポジウムが開かれました。このシンポジウムは、2008年1月に開かれた「高等教育と科学・技術の真の発展のために」に続くものです。

JSA学術体制部は、「女性研究者技術者委員会」のほか、「科学・技術政策委員会」、「大学問題委員会」、「国公立試験研究機関問題委員会」、「科学者の権利問題委員会」「民間企業技術者・研究者問題委員会」、「若手研究者問題委員会」の7つの問題別委員会で構成されています。シンポジウムではそれぞれの委員会から、一件ずつ（「若手」からは2件）の報告がありました。

わが国の科学・技術政策は、1996年からの3期にわたる科学技術基本計画に沿って進められ、昨年3月11日の東日本大震災をはさんで、今年第4期が始まったところです。この間、研究・教育現場では、国立試験研究機関・国立大学が法人化され、毎年1%の運営費交付金削減が行われてきました。私立大学においても、私立学校振興費が削減されています。その結果、教員数の削減が進み、若手教員の大部分は任期つき雇用となりました。「高学歴ワーキングプア」という言葉で表わされる博士の不安定雇用は大きな社会問題となっています。一部の重点研究への偏った予算配分、教員の評価制度の強化などにより、研究者間の競争は激化し、研究の質の

悪化が懸念されています。

表記のシンポジウムは、学術をめぐる発生しているこうした問題の解決に向けて、共同して立ち向かうためのものです。

「女性研究者技術者委員会」が取り組んでいる女性研究者に関わる問題も、「安定した職につけない」、「不安定雇用のため子どもを産めない」など深刻さを増しています。政府は女性研究者の数を増やすことを目的とした支援策を進めていますが、上述のような学術をめぐる負の状況がある限り、女性だけが恵まれた環境を与えられるとは到底考えられません。

本シンポジウムにおいて、女性委員会は「学術分野の男女共同参画―前進面と課題」と題した報告を、石渡と池上幸江さんで手分けしておこないました。前半は石渡が、「女性研究者・技術者の現状とその解決へ向けての政府女性研究者支援策の意義と問題点」を報告し、後半は池上さんが「政府女性研究者支援ファンドを受けている機関へのアンケートについて」報告しました。この報告の元の記事は、「日本の科学者」2011年12月号 p. 11、「学術分野の男女共同参画―前進面と課題」(JSA 女性研究者技術者委員会)です。

このシンポジウムの議論を踏まえ、学術政策の改善を目指して、関係省庁・政府などへの働きかけがすすむことを期待しています。(女性研究者技術者委員会 副委員長 石渡眞理子)

3、各地の話題 東京支部「はづきの会」の活動について

東京支部女性会員有志が「はづきの会」という名称で、長く活動をしてきました。以前は若い会員や現役世代も集り、会員の研究や仕事の話の聞いたり、悩みを話し合ったり、女性研究者や技術者に関連する諸問題についても議論をしていました。しかし、段々と参加者も減り、顔ぶれも固定化してきました。2010年の集りで、東京支部の女性会員の活動を活発化させるために、どうするか議論が行なわれました。そこで、女性会員の現状や要望に関するアンケートをし、また「はづきの会」への参加もよびかけました。さらに外に向けての活動として、地域の活動との連携を深めるために、女性会員の専門分野で交流する機会を持つことが提案されました。会員の多くが新婦人の会、生協、母親大会その他の活動にも係っておられ、そうした繋がりを生かした活動の可能性があると思われました。この計画を検討している中、2011年3月11日の東日本大震災後の原発事故では多くの母親たちが、放射能の影響に大きな不安を抱えておられました。そこで、2、3人がこの問題で一般市民の方々の集りに講師として参加し、様々な形で地域の方々との連携を深めることができました。同時にこの活動では科学者会議への入会者を迎えることもできました。今後は原発以外の問題でも交流できるようにするのが課題です。

他方、女性会員全体の活動の活性化は課題として残っています。2011年の「はづきの会」において、交流誌発行の提案がありました。現在多くの会員がお互いの顔が見えず、科学者会議の活動には参加が困難な状況もあります。交流誌を通して、若い院生などの会員、現役会員、退職後の会員がそれぞれの悩みや経験を交流する場を作ることがこの交流誌の目的です。交流誌は「今、私は・・・」としました。2012年9月に1号が無事発行され、男性会員も含めて好評です。現在第2号発行に向けて準備中ですが、できれば年に3回位のペースで発行できればと考えています。(東京支部 池上幸江)

第13回女性研究者技術者シンポジウム報告集を販売中

価格:1000円+送料 代金支払い:郵便局振込み 申込み先:JSA 全国事務局

JSA 全国事務局:住所 〒113-0034 東京都文京区湯島 1-9-15 茶州ビル 9F

Tel 03-3812-1472 Fax 03-3813-2363 Mail zenkoku アットマーク jsa. gr. jp

申込み方法:住所・氏名・連絡先 TEL・アドレスを記入し、FAX かメールで

4. 第47期 女性研究者技術者委員会活動報告

4-1 女性研究者技術者委員会

①第1回委員会

*日時 2012年4月14日 18:00~21:20

*場所 日本科学者会議事務所

*出席者(敬称略) 沢山、朴木、金子、今枝、池上、石渡、中村(以上 委員)、
藤井(連絡員)、河野(委員兼担当常幹)、上野(学術体制部長)

*議題

*47期(2011年)活動総括

- ・活動:第14回女性研究者・技術者シンポジウム、「日本の科学者」12月号特集執筆
- ・47期委員会、女性シンポ会計:組織活動費、問題別委員会費等より補填・執行
- ・シンポ報告集頒布:2012.4.14現在50部(シンポ スタッフ贈呈分、支部買取含む)

*48期(2012年)の取り組み

- ・第19総学 女性研究者・技術者分科会 案 本ニュースのとおり
- ・第19総学 女性研究者・技術者交流会 案 本ニュースのとおり
- ・総学分科会企画:沢山(委員)、交流会企画:笹倉(総学実行委員 岡山支部)

*ヤングサイエンティストレクチャー(予定)

- ・日時 9月15日(土)14:00-14:20
- ・報告 立命館大学、長谷川千春氏(委員)

*2012年度女性研究者・技術者委員会体制(敬称略)

- ・委員長 沢山美果子(岡山支部)
- ・副委員長 石渡真理子(東京支部)
- ・ホームページ 今枝 暁子(東京支部)
- ・広報(ニュース) 中村 寿子(大阪支部)
- ・担当常幹 河野貴美子(東京支部 専任)、
米田貢(東京支部 全国全国事務局長 兼任)
- ・その他 2012年新連絡員 杉田真衣(石川支部)

②第2回委員会

*日時 2012年09月15日 13:10~13:50

*場所 岡山大学 19総学分科会会場

*議題

*19 総学「女性」分科会参加数

- ・参加人数：交流会 21 名、分科会 16 名、分科会アンケート 8 名(全員ニュース掲載許可)
- ・分科会参加非会員：3 名 加入申込書手渡し済み

*19 総学分科会企画、ならびに女性研究者技術者委員会の活動総括

・参加者の感想総括：

報告内容は、おおむね本当に良かったという感想であった。

森岡先生の基調報告により、女性研究者問題をより広い文脈、社会的背景のなかに位置づけることができた。

女性研究者のライフコースにそった形で、どのような課題があるかが明確になった。

どの報告も論旨が明快であり、報告の仕方も、それぞれに個性的で充実していた。

- ・企画・活動総括：女性研究者がうけている困難(学生の育て方、ポスドクの現状等)に関して、社会全体の中での位置づけが見えてよかった。委員会として組織的に準備した成果である。欲を言えば問題解決への助言・提案等がほしい。

参加者が少ないこと、参加者を増やす委員会としての対策必要。

「女性研究者」をキーワードにする企画が難しく、報告者の人選が難しい。

女性 JSA 会員、女性委員会委員を増やす努力が必要。

電子媒体の活用により、会員やシンポジウム・総学分科会参加者を増やすことを検討。

JSA ホームページの有効活用を検討。

(例 雑誌投稿論文の要約掲載と関連学会等へのリンク、ブログ等)

女性委員会として、若手に研究成果を発表してもらうチャンスを作ることを検討。

*女性研究者技術者委員会活動記録と予定

・第 48 期

第 1 回女性研究者技術者委員会(2012 年 4 月)

第 2 回女性研究者技術者委員会(2012 年 9 月)

第 19 総学分科会(2012 年 9 月)

・第 49 期

第 1 回女性研究者技術者委員会(2013 年 後日調整)

*女性ニュース 案(=承認) No. 25 女性研究者技術者ニュース(本号のとおり)

4-2 女性研究者・技術者委員会関連 交流の記録(2012 年)

メーリングリストによる情報交換・議論、各種呼びかけと応答(2012 年 12 月 15 日現在)

zenkoryu(女性研究者・技術者、男性会員含む、自由参加用) 計 13 件+返信

jsa-z-woman(委員・連絡員用)計 86 件+返信、他(シンポジウム企画、ニュース打合せ等)

「女性研究者技術者委員会」のページが多くの皆様に活用されますように研究活動や平和活動の紹介やお役に立つ情報がありましたら原稿を是非お寄せください。よろしくお願いたします。 メールアドレス： g. imaeda@network.md.point.ne.jp

(女性研究者技術者委員会 ホームページ担当 今枝暁子)